

教育実習に対する山口大学学生の反応

池田 幸夫

Some Responses of Student Teachers to the Student

Teacher Training in Yamaguchi University

Yukio IKEDA

(Received November 29, 1996)

キーワード：教育実習、教師養成教育、大学教育、教員養成

1 はじめに

社会状況の変化に伴い、教育学部をめぐる状況は大きく変わってきた。教員養成のあり方に対してもいくつかの点で再検討を迫られている。例えば、児童生徒の減少に伴う教員需要の大幅な低下は、教育学部を卒業しても教職に就けない学生の増加という異常な事態を招き、多くの高校生にとって「先生」は、もはや魅力ある職業ではなくなってきている。このことは、教育に対して意欲をもつ優秀な高校生が教育学部に集まりにくい状況を生み、将来的には教師の資質がさらに低下するという悪循環が懸念される。

一方社会的には、「不登校」や「いじめ」など教育に関わる深刻な問題が多発するようになり、実践力、指導力のある有能な教師の養成は今まで以上に期待されている。教育学部に課せられた社会的要請を果たしていくためには、優秀な学生が集まりにくい環境の中で、有能な教師を育成して社会に供給しなければならない、という厳しいジレンマを教育学部は打開していかなければならないのである。

全国的な大学改革の流れの中で、山口大学教育学部においても平成8年度には大幅な改革が完了した。この改革の柱は、学部改組と4年一環教育への移行を中心とした大幅なカリキュラム改革であった。教員養成課程においては、教育実習を中心とした実地教育は最も重要な教育活動である。実習の具体的な改革については平成8年度から検討を始め、平成9年度新入生か

* 山口大学教育学部

ら順次実行に移されることになっている。

筆者は、1995年4月から教務委員に任命され、山口大学の教育実習の企画運営に当たってきた。そこで感じたことは、本学の教育実習は基本的にはうまく運営されてはいるが、教育を取りまく最近の外的状況や学生の資質の変化に対応するためには、さらにいくつかの点で抜本的な改善の必要性があるということである。

このような状況は他大学においても同じであって、大学改革に絡んで教師養成教育のあり方が、全国の各教育系大学・学部で検討され、一部ではすでに実施に移されている。筆者は、平成7年度と平成8年度の日本教育大学協会全国教育実習部門研究協議会に参加する機会を得たが、ここでは教育実習の改善に関する取り組みが多数報告されている。

大学の研究紀要などに最近公表された教育実習に関する研究を概観すると、教育実習を体験することによって学生の教職意欲が向上することや、教育実習が教師養成教育において最も価値のある授業科目として、学生にも認められていることなどが報告されている（羽原、1994、吉良他、1974）。また、大学の学部教育との関係では、学生と大学教官との間に大きな意識のずれがあることも指摘されている（若原他、1985）。この他に、教師養成教育を考える場合に無視できないことは、教師になる目的を持たずに教育学部に入学してくる学生が、おそらく40%以上はいるということである。この数字は、羽原（1994）と若原他（1984）のデータから予想したものであるが、これからの教師養成教育は、この実態を無視して進めるわけにはいかないであろう。

以上の先行研究が指摘していることは、基本的には本学にも当てはまると考えられる。しかし、教師養成教育は大学ごとの個別の事情にも強く依存しているので、先行研究の成果を参考しながらも、本学の実習生がもっている課題や意識を十分に把握しておくことは必要なことである。本研究の目的は、以上のような問題意識に立って、山口大学教育学部における現在の教育実習の問題点を明らかにして、新しい教師教育のあり方を考察するさいの手がかりを得ることにある。ただし、本調査は筆者の個人的責任において行ったもので、教育学部の公的な立場を代表するものではないことを断っておく。

2 山口大学の教育実習

山口大学教育学部の教育実習は、3年生後期に附属学校（小学校2、中学校2、養護学校1、幼稚園1）で行われる基本実習（4週間）と、4年生前期に山口県内の公立小中学校および養護学校で行われる委託（応用）実習（2週間）を中心に構成されている。本学では応用実習を委託実習と呼んでいる。これら2つの実習は、教員養成課程に所属する学生は全員必修である。これ以外に、希望者を対象に3年生後期（11月）に副免実習を附属学校・園で実施している。小学校教員養成課程の教育実習を、一例として図1に示している。中学校教員養成課程の実習は、これに準じている。

基本実習と委託実習は、目標がいくらか異なっている。附属学校で実施される基本実習は、教師としての実務や心得に関する基本的な技能や態度の育成、委託実習では基本実習で学んだことを一般の公立学校で応用することによって、実践的能力をさらに拡大深化させることを目的にしている。

本学の委託実習は、山口県教育委員会の協力を得て、山口県内の公立小・中学校で行われている。学生の振り分けは、県内8地区の教育事務所から推薦された委託校の受け入れ可能人数に従って、学生の希望を聞きながら大学が行っている。平成8年度の場合、委託した実習校は小学校37校、中学校22校、および養護学校8校、合計67校で、受け入れ数は一校あたり平均3～4人である。委託実習校との間には、毎年4月に「委託実習連絡協議会」を開き、委託実習の目標、実習内容、評価など、実習全般について互いに連絡を取り合い、実習が効果的かつスムーズに実施されるようにはかっている。実習生の配属は、学生の希望は一応とるが、受け入れ定数を超えた場合には抽選で決める。したがって、山口市から遠隔地の学校に配属された学生は、旅館や民宿を利用しなければならなくなり、宿泊費や交通費などの経済的出費は決して少なくない。

	1年生	2年生	3年生		4年生		実習校
			前期	後期	前期	後期	
事前事後指導					
基本実習			4 ——				附属校
応用実習					2 —		公立校
副免実習				1 —			附属校

※ 数字は実習期間の長さ（週）。この他に障害児教育実習を受けることができる。

図1 山口大学教育学部小学校教員養成課程の教育実習

3 調査方法

調査は、平成8年3月に本学の小学校教員養成課程と中学校教員養成課程を卒業した実習生を対象に、無記名の質問紙法によって行った。調査日は、平成8年1月31日である。この日は卒業論文の提出手続きの日であり、手続きに学生部室を訪れた卒業予定者全員に調査用紙を配布し、必要事項に回答させた後、所定の場所に設置した回収箱に各自の自由意志で投函させる形式で行った。研究計画を立ててから卒業生全員に調査用紙を配布できるのは、この日しかなかったわけだが、学生にとっては卒論提出日というあわただしい日であったために、回収率は

表1 調査の回収率

課程	性別	在籍者数	回収数	回収率(%)
小学校	男	79	45	57.0
	女	93	62	66.7
	計	172	107	62.2
中学校	男	52	26	59.0
	女	41	26	63.4
	計	93	52	55.9

予想よりかなり低かった。回収状況は表1に示されている。

調査した内容（添付資料参照）の中で、ここでは主として、次の3点について分析を進める。

- ①実習の前後における、教職意欲の変化。
- ②基本実習および委託実習それぞれに対する、全体的な感想。
- ③基本実習および委託実習それぞれに対する、満足・不満足の原因。

4 結果と考察

(1) 教職への意欲

まず基本実習と委託実習を受けた学生の教職志望率から調べていこう。調査では、「①志望している」、「②志望していない」、および「③未定である」の3つの選択肢から該当する項目を選択させた。図2、3に示されているように、3年生後期の基本実習を受ける時点では、小学校教員養成課程の学生の約60%、中学校教員養成課程の約75%が教職に就くことを希望している。教職志望率は、4年生前期に委託実習を受けるときには両課程とも、約5%増加している（図3）。この増加は、未定者が教職志望に変わったためであるが、基本実習を経験することによって、未定であった者が教師になることを意識するようになったためかもしれない。また、データを見ると、すでに「志望しない」ことを確定していた学生数は、基本実習と委託実習ではほとんど差がない。これは、志望していない学生は、基本実習の体験によってあまり意識変化が起こらなかったためであろう。平成8年度の実習生に対する現在調査中のデータによると、本学の教職志望率は最近の教員採用率の減少を反映して、図2よりさらに約10%も低下しているという結果が出ている。羽原（1994）によると、岡山大学でもほぼ同じ傾向があることが報告されていることから明らかなように、教育学部の状況は全国的にますます厳しさを増している。

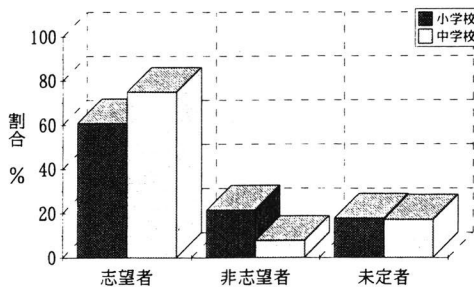


図2 基本実習時の教職志望者

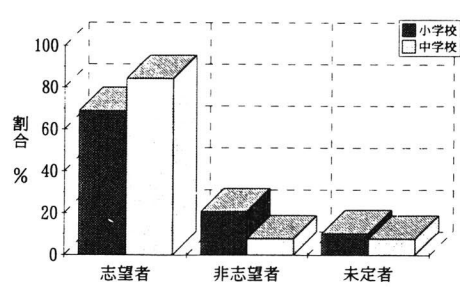


図3 委託実習時の教職志望者

教職志望意欲と教育実習との関係をもう少し詳しく調べてみよう。今回の調査では、基本実習時及び委託実習時における教職志望の程度を、「志望していた」、「志望していなかった」、および「未定であった」の3つのカテゴリーに分けて実習生を振り分け、それぞれのカテゴリーごとに実習による教職意識の変化を調べた。中学校課程についてはサンプル数が少なく、「非志望」と「未定」のカテゴリーに入るデータ数が少なすぎたので、分析していない。

図4～6はその結果である。これらの図から次のことが指摘できるであろう。すなわち、教

職への意欲を持って取り組んだ実習生は、実習を経験することによって教職意欲をさらに強めるものが60～80%いる（図4）が、教職に就かないことをすでに決めている実習生については、教職意欲を増す学生は少ない（図5）。実習時に未定であると答えた者の約60%は、教職意欲が増加したと答えている（図6）。これらのことは、「教職への意欲をもっている者ほど実習効果が上がり、教職意欲を高める」という吉良他（1974）の指摘とよく調和している。

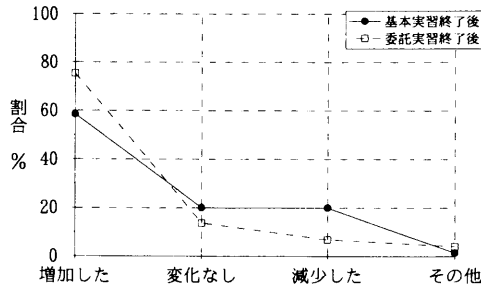


図4 教職志望の強い実習生の
教職意欲の変化

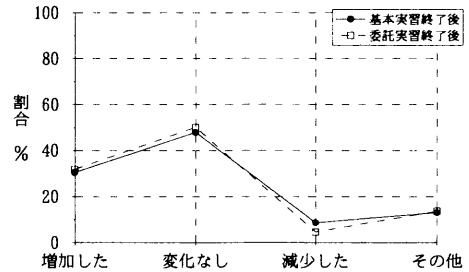


図5 教職を志望していなかった
実習生の教職意欲の変化

以上の結果から、教育実習によって学生の教職志望度を上げるためには、実習に入るまでに学生の教職意識を高めるような指導が必要となる。このことは、資質の高い教師を育成するためには、実習そのものの改革に加えて、学部のカリキュラムの中に教育実習をどのように位置づけるのか、より直接的には、実習までの学部教育の内容をどのように構成すべきか、など克服しなければならない課題があることを意味している。これは教育実習を改革するさいに考慮しなければならない問題である。

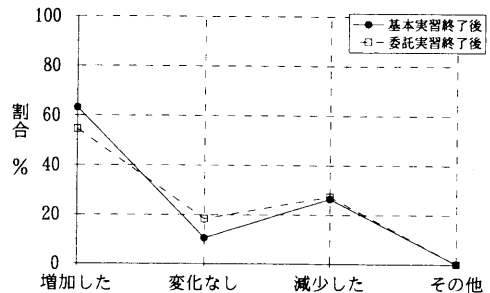


図6 未定者の教職意識の変化。

(2) 教育実習に対する満足・不満足

教育実習に対する学生の評価を、次の2つの観点から調査した。一つは、実習の全体的な満足度、他の一つは実習に対する満足・不満足の理由である。

まず、全体的な満足度は基本実習と委託実習それぞれについて、①大変満足、②ほぼ満足、③どちらとも言えない（普通）、④やや不満、⑤大変不満、の5段階の尺度で調査した。図7、8は、その結果であるが、どちらの実習についても満足に感じたもの（①と②）が大多数を占め、不満を感じたもの（④と⑤）は大変少ないことが分かる。このデータは本学の教育実習が、基本的にはうまく実施されていることを示している。

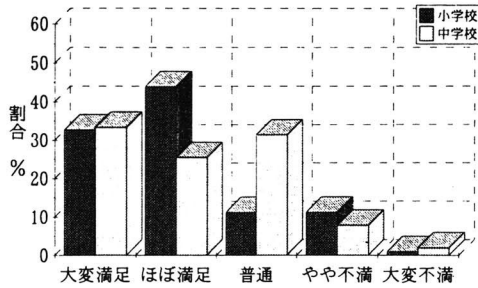


図7 基本実習の満足度

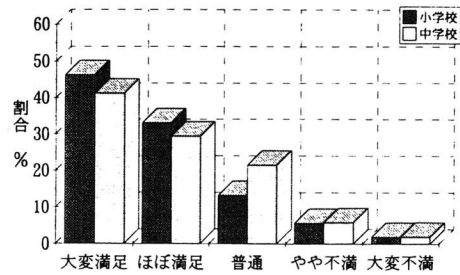


図8 委託実習の満足度

「大変満足した」者の割合が、基本実習よりも委託実習で高くなっていることは、基本実習で基本的な事柄を学習した後、いくらかの余裕を持って委託実習に取り組むことができた学生が多かったためであろう。委託実習は交通費や宿泊費など、学生の経済的負担への不満は大きいですが、図7・8の結果は、附属学校での基本実習と一般公立校における委託(応用)実習が、それぞれうまく機能していることを、間接的に証明することになっている。このことは、90%以上の実習生が委託実習の必要性を認めているという事実(図9)からも確認できる。

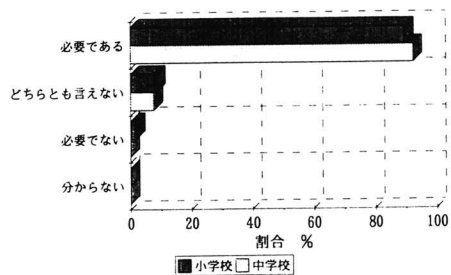


図9 委託実習に対する実習生の意見

次に、実習に対する満足・不満足の原因を探ってみよう。調査では、「満足」に感じる理由と「不満足」に感じる理由として想定される10項目をあらかじめ設定し、それぞれに該当する理由を0～3個の範囲で選択させた。項目は、筆者の研究室に所属している学生の意見を参考にして選んだ。

図10・11は「満足」、図12と13は「不満足」に関する結果である。

まず、教育実習に対して「満足した」要因として圧倒的多数の実習生が、「児童生徒とのふれ合い」を挙げている。これは中学校課程よりも小学校課程の実習生に強く見られる傾向であるが、基本実習と委託実習による違いはあまりない。教育実習によって子供にじかに接するという体験は、彼らにとってはきわめて新鮮で、インパクトの強い体験であったと言えるだろう。このように、教育における直接体験は学生の教育への意欲と関心を向上させるためにきわめて有効な機会を与えている。

現在の小学校・中学校課程の学生は、教育学部に所属していても、児童生徒とふれ合う機会はほとんどない。大学教育の中に児童生徒とのふれ合いの機会をどのように取り入れるのかということも、教師養成教育の重要なテーマの1つであろう。

ところで、「児童生徒とのふれ合い」を満足要因として挙げる割合が、小学校課程に比べて中学校課程ではかなり低くなっている。これは、中学校課程の実習生は教科配属になっていることや、小学生と中学生の気質の相違が大きな原因であろうと考えられる。ある実習生が感想

として述べているように、中学校課程では教科指導の教材研究や指導案の作成に追われることが多く、生徒と自由にふれあうゆとりや時間が少ないことも、原因の一つかもしれない。

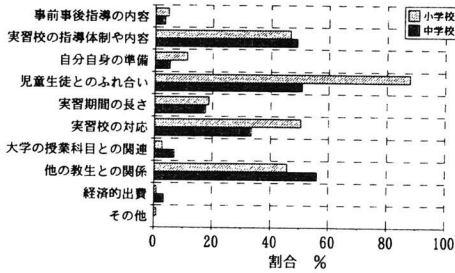


図10 満足に感ずる理由 (基本実習)

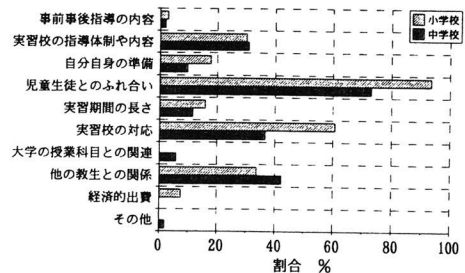


図11 満足に感ずる理由 (委託実習)

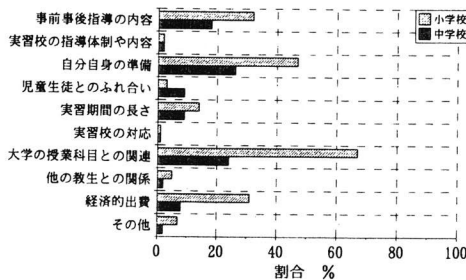


図12 不満足の原因 (基本実習)

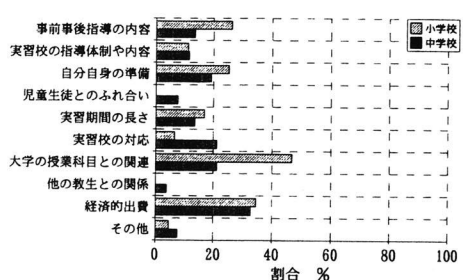


図13 不満足の原因 (委託実習)

この他に、「実習校の対応」や「実習校の指導体制や内容」が、満足要因として高い支持を得ている。このことは、教育実習が全体的にはうまく運営されていることを示すものと理解できる。「他の教生との関係」を満足要因に挙げる学生は、特に中学校課程で多く、逆に「不満足要因」としてはほとんど挙げられていない(図12、13参照)。このことは、実習生が互いに良好な協力関係の中で実習に取り組んでいることを示すもので、大変好ましいことであると思う。

次に不満要因に注目してみると、「大学の授業科目との関係」と「事前事後指導の内容」が、不満要因として大きく挙げられ、逆に満足要因としてはほとんど挙がってきていない(図10~13)。この傾向は、小学校教員養成課程でより強くなっている。教員養成系の大学・学部で、大学の授業に対する学生の不満が強いことは、山口大学に限ったことではなく、どの大学でも昔からよく指摘されてきたことである。最近では、国立大学協会教員養成制度特別委員会が、大学に対する学生の不満の約70%は授業に集中していることを明らかにしている(国立大学協会教員養成制度特別委員会、1993)。この調査は、全国の教育系大学・学部の学生約5,000人を対象にした大規模なもので、教育系大学・学部生の実態を把握するよい資料である。

学生の授業への不満の内容については、上に挙げた国大協の報告書(1993)、織田(1980)、羽原(1994)の論文にさまざまな意見が掲載されているが、中でも特に強い意見は、「大学で勉強してきたことが教育実習で全く役に立たない」という不満である。本学においても、この

意見は強い。教員養成という明確な目的をもった教育学部でありながら、入学してくる学生の志望動機はかなり多様である。また、学生の資質や基礎的な学力面のばらつきもかなり大きい。このような現状を考えるならば、カリキュラムの改善というハード的な改革と、学生の実体を考慮した授業科目の内容や教授方法の改善というソフト的な改革が同時に進められなければ、学生の資質の向上は絵に描いた餅で終わってしまう危険性があると思う。

ただし、筆者は「大学での勉強が教育現場で役に立たない」という学生の主張が、全て正しいとは思っていない。問題があるのは、「豊かな」教養や「専門的な学芸」を教授しようとする大学と、教師に必要な「人間性」や「実践的能力」を求める学生との間に、大学教育に対する認識の不一致（若原と佐藤、1985）がありながら、その不一致を解消する努力が足りないのではないかということである。あまりに性急に、現場ですぐに役に立つノウハウを求める学生の学習態度は改善してもらわなければならないが、教官側も、学生の資質を的確に把握し、学生の感性に響くような授業の工夫をすることが、今後ますます必要になると思う。

基本実習の不満要因として2番目に、「自分自身の準備」が挙げられている（図12）。この言葉にはやや曖昧さが含まれているが、「実際に実習をやってみると予想以上に難しかった」、「自分の学力の不十分さを痛感した」など、自分自身への反省の表現ではないかと考えられる。このことは、「大学の授業科目との関連」や「事前事後指導の内容」が不満要因として挙げられていることと、全く無関係ではないと思う。教師養成教育の改善は、事前事後指導を含めた教育実習の手直しだけで達成されるものではなく、学部教育全体の質的転換をはかることも同時に必要である。

5 まとめ

現在の教育実習の問題点を明らかにして、より効果的な教師教育のあり方を考えるための基礎的資料を得ることが本研究の目的であった。研究への取り組みが少しばかり遅れて、データは必ずしも量的に満足できるものではなかった。今回の研究によって、教育実習を中心とした教師養成教育の研究に関して、基礎的な資料を得ることはできた。今後は、本研究の成果を基にして、より詳細な調査を行い、教育実習を中心にした新しい教師養成教育システムの開発、特に教科指導のあり方について研究を進めていく予定である。

最後に、本研究で得られた結論をまとめておく。

- (1) 教育実習生（3年生）の教職志望率は、60%まで落ち込んでいる。
- (2) 教育実習による学生の意識向上は、実習時に教職意欲を持っているか否かに強く依存している。
- (3) 基本実習及び委託実習に対する実習生の不満は大変少ない。
- (4) 実習の満足要因として、児童生徒との触れ合いを挙げる学生が最も多い。
- (5) 一方、学部の授業科目に対する学生の不満は根強い。特に、小学校課程の学生の不満は強く、大学として早急に対応策をとる必要がある。

文 献

- 羽原貞夫（1992）、教育実習の効果について－小学校主免教育実習生の実態調査を通して－、岡山大学教育実習研究年報、第3号、63－76.
- 羽原貞夫（1994）、教育学部の教員養成に関する学生の意識－教育学部のカリキュラムに関する意識調査を通して－、岡山大学教育実習研究年報、第5号、41－57.
- 今津孝次郎（1982）、教育実習と大学教育、三重大学教育学部研究紀要、第33巻、13－21.
- 伊丹俊之（1995）、教育実習における事例研究－教職意識の向上を求めて、その2－、岡山大学教育実習研究年報、第6号、83－92.
- 吉良 侯・佐藤静一・篠原弘章（1974）、教育実習体験に関する研究－教師観及び教職意識の変化－、熊本大学教育学部紀要（人文科学編）、第23号、165－182.
- 国立大学協会教員養成制度特別委員会（1993）、教育大学・教育学部学生の教職への意識と意見（中間報告）.
- 織田 揮（1980）、教育実習に対する学生の態度－三重大学教育学部教育実習調査報告－、三重大学教育学部研究紀要、第31巻、211－223.
- 佐藤静一（1978）、教育実習に関する教育心理学的研究（Ⅱ）－教職志望度と教育（共感）体験－、熊本大学教育学部紀要（人文科学編）、第27巻、229－238.
- 若原直樹・佐藤定秀（1984）、本学（旭川）学生の教職意識と教育実習の効果に関する調査（Ⅰ）、北海道教育大学紀要第一部C教育科学編、第35巻、第1号、1－15.
- 若原直樹・佐藤定秀（1985）、本学（旭川）学生の教職意識と教育実習の効果に関する調査（Ⅱ）北海道教育大学紀要第一部C教育科学編、第36巻、1号、27－35.

参考資料

実習についてのアンケート（小学校・中学校教員養成課程用）

卒業するに当たって、これまでに受けてきた教育実習についてあなたの意見を聞かせて下さい。将来の教育実習改善の資料にしたいと思います。

A あなたの所属講座と性別

課程	所属	性別	男・女
----	----	----	-----

B 基本実習

- (1) あなたが受けた基本実習には、どの程度満足していますか。次の5段階の尺度から該当する尺度を選んで、回答欄に○をつけて下さい。

<input type="radio"/>	①大変満足している
<input type="radio"/>	②どちらかいうと満足している
<input type="radio"/>	③普通（どちらともいえない）
<input type="radio"/>	④どちらかいうと不満足である
<input type="radio"/>	⑤大変不満足である

- (2) 基本実習について、「満足した」と感じた理由と、「不満足だった」と感じた理由を、下の①～⑩から選び、それぞれ最大3つまで挙げて下さい。

①大学における事前事後指導の内容	⑥実習校の対応
②実習校の教科指導の体制や内容	⑦大学の授業科目と実習の関連性
③自分自身の準備（学力や心など）	⑧他の教生との関係
④児童・生徒とのふれあい	⑨経済的出費
⑤実習期間の長さ	⑩その他

回答欄（最大3まで）			
「満足した」主な理由			
「不満足」主な理由			

- (3) 基本実習の期間としてはどの程度が適当だと思いますか。適当だと思う期間に○を付けて下さい。

- ① 1週間 ② 2週間 ③ 3週間 ④ 4週間 ⑤ 5週間以上

C 委託実習

(4) 委託実習は教職を志す者にとって必要だと思いますか。該当する項目の番号に○を付けて下さい。

- ①必要である ②どちらともいえない ③必要ない ④分からない

(5) 委託実習の期間としては、どの程度が適当であると思いますか。適当だと思う期間に○を付けて下さい。

- ①1週間 ②2週間 ③3週間 ④4週間 ⑤5週間

(6) あなたが受けた委託実習には、どの程度満足していますか。次の5段階の尺度から該当する尺度を選んで、回答欄に○をつけて下さい。

回答欄	尺 度
	①大変満足している
	②どちらかいうと満足している
	③普通（どちらともいえない）
	④どちらかいうと不満足である
	⑤大変不満足である

(7) 委託実習について、「満足した」と感じた理由と、「不満足だった」と感じた理由を、下の①～⑩から選び、それぞれ最大3つまで挙げて下さい。

①大学における事前事後指導の内容	⑥実習校の対応
②実習校の教科指導の体制や内容	⑦大学の授業科目と実習の関連性
③自分自身の準備（学力や心など）	⑧他の教生との関係
④児童・生徒とのふれあい	⑨経済的出費
⑤実習期間の長さ	⑩その他

回答欄（最大3まで）			
「満足した」主な理由			
「不満足」主な理由			

D 教育実習全般

(8) 基本実習および委託実習を終えた後の気持ちを思いだして答えて下さい。教職に対するあなたの意識はそれぞれの実習終了後に、どのように変化しましたか。次の項目から該当する者を1つ選び、○をつけて下さい。

基本実習終了後	教職を志望していた人	①志望意欲が強くなった
		②変わらなかった
		③志望意欲が減少した
		④その他
	教職を志望していなかった人	①教職に就きたいと思うようになった
		②変わらなかった
③志望しなくてよかったと思った		
④その他		
未定であった人	①教職に就きたいと思うようになった	
	②変化しなかった	
	③教職に就きたいと思う気持ちが減少した	
	④その他	
委託実習終了後	教職を志望していた人	①志望意欲が強くなった
		②変わらなかった
		③志望意欲が減少した
		④その他
	教職を志望していなかった人	①教職につきたいと思うようになった
		②変わらなかった
		③志望しなくてよかったと思った
		④その他
	未定であった人	①教職に就きたいと思うようになった
②変化しなかった		
③教職に就きたいと思う気持ちが減少した		
④その他		

(9) 教育実習の改善について、意見があれば何でも書いて下さい。